

説苑

再び保科正之の勤王に就て

木村 定三

先に正之公の勤王について、若干の史實を擧げて私見を世に問ふたが、問もなく秋山角彌氏が「和魂漢才に就いて」の論文中に、三度公の勤王につき予と同一意見を發表されてゐるのを見、大に知己あるを感じ、こゝに再び私見を披瀝して前文を補綴することとした。

予は世人の會津に關する評論には、明治戊辰の戦に伴ふ種々なる錯覺の加りがちなを遺憾に思ふ。公の如き三百五十年前以前の人物の評論にすら、とかく倒敘的推論が用ひらるゝのは甚だ不當である。殊に國學の勃興が徳川中世以降を飾つた爲に、それ以前の思想が十分に闡明されずして、元祿以前と以後とが區別されざる傾を見る。かくて元祿以後明治までの幾多交錯せる色彩と矛盾せる被服を以て、公の身邊を飾らしめて居ることは果して正當であらうか。

吾人はかゝる一切の被服をぬぎすて、慶安、寛文時代の公其儘の姿を、赤裸々に眺めたいのである……元祿武士の姿ではなく實に戰國時代の面影を忍び得る武人爲政者として、敬神家としての公を仰ぎ見たいのである。

公は老佛を學びて老佛の書を焼き、濂洛關閩の心を學びて之に嫌らず、更に神道に心をひそめて遂に神道唯一相傳の第一人者となるに至つた。之は長く公の心に潜んで居つた強い誠忠の念が、こゝに至て共鳴一致を發見したのであり、公が萬世一系の天皇をあらん神と仰ぎまつりて、大君の威綬の發揚に勉められたのは、公としては全く自然の行き途であつたと思ふ。

闇齋の門人玉木正英は其著、玉簫集に

神代のまにまにおほらかにしろしめせば、神の道はたがひて他に求むべき事なきを、自ら神の道ありといふなり。神は即ち天皇なれば神の道とは天皇の道なり。

と其師の精神を祖述して居る所に、闇齋の天皇信仰……皇室中心の國家觀念を見る。併して吉川惟足が公に説きし詞に

やまとの道は天地と共に神明あらはれ給ひて、教へ置給ふ道なれば、其教に背くは天地の道に背くなり。天地の道に背く時は、天照太神の罪人なり。されば治國の要道は天照太神が世を治め給ふ精神を以てせらるべし。

と。かゝる國家觀及び神觀は公の精神と合致せるもので、結局公の國家觀念と神道によつて深められた其信念——即ち現人神尊崇の念の如きは到底當時の閥老が考へ及ばざる貴重なるものであり、又學者等が窺知し得ざりし深遠なものであつたことを疑はぬ。

家老友松氏興が、土津神社造營に努力したるは公の精神を繼承して神道王道の復興を謀つたのであるが、見瀬山由來記の一節に

神君儒道を御學び候て、仁の愛、智の藏、御發明に候、日本に於ては古今御一人に候、然れ共本朝唯授一人之傳を御重任の上は、此を御棄て候て御没後葬祭等、異朝周公孔子の道を以て治め候様には、決して仰置かれ難き義に候、況んや夷狄佛氏の道は人倫を斷ち、禽獸に均しく候故、倭漢の王道より忌嫉候得ば言ふに及ばず候臣たるもの斯の如き道理を辨ひ候はゞ、假令御遺言之なくとも左道を以て治め奉り、臣の職を失ふべき様之なく候、特に御臨終に達んで愚臣を召しての御遺言、謹んで之を承り心肝に銘じ服膺致候、君を君と致候、臣は平生の命令も終身之を守るべき處なり、就中御末期の御遺言は、繫る處甚大にして一事一言も變すべからず。

と。之を見ると、彼が其位置生命を堵しても公を表明せんとする心事が、明かに表れて居り、また如何に公が神道主義者として終られたかを語つて居る。

されば公の永逝の當時、稻葉大老が「誠に凡人には無之」と洩した語は決して謬言諛辭に非ざることを思はしむる。

公の勤王精神が如何に其女婚たる前田綱利（松雲公）に影響せしかを知ること、亦公の側面觀察の一法であると思ふ。「加賀松雲公傳」によつてその一二を擧ぐれば

公の母舅水戸光圀卿は、大日本史を撰し、岳父保科正之君は神道を尊信す。而して二君の學徳公に影響をなせしは前既に之を敘したる如し、吉川惟足は慶公の邸に講説す、其高弟田中一閑は正之君の薦を以て公に仕ふ。

と。惟足が公の推舉によつて松雲公に謁するに至りたるはいふまでもなく、彼は松雲公の爲に神代卷を講し、またその求によつて神代卷を圖解し具之に跋せり、其跋文は現に加賀家に存す。また同傳に

松雲公南朝の皇統の正を得て、而して其業終らざるを慨し、其英主賢輔をして潜德幽光、長へに宣揚の期なからしめ、其忠臣孝子をして千載の下向は恨を九原に吞ましむるに忍びず、是に於て或は其正統を唱道して以て侍臣に誨へ、或は其史料を編纂して、以て顯本を明かにし、或は其詠歌を選擇、蒐輯し、或は其事蹟を圖解頒布する等、之を表彰顯揚する所以の方を講ずること甚だ力められたり……………公弱冠より夙に稱公懿蹟圖を製する志あり……………公狩野探幽に命じて、櫻井驛訣別の圖を描かしめらる。寛文十年四月其圖成る。公乃ち之を舜水に致し、其作る處の賛を圖上に書せしめらる。舜水の書するは翌年十一月に在り、時に公二十八歳なり。

と。この賛文は水戸光圀卿が元祿五年湊川に建てられし碑文……………かの有名な忠孝義乎天下、日月麗乎天のそれである。かくこの建碑より二十年前既に朱舜水の稿本を見るからには、義公をして茲に至らしめる爲には、松雲公暗佑の力の存せしを思はしむる。而してまた岳父正之の力を考へねばならぬ。

非凡な松雲公をして、其器をなさしめた背後には公の感化の大なりしことは疑はれぬ。

予は公の湯武放伐論については既に之を詳述したるが故に省略し、主として公の用ひたる大君の意義と出典とを考察する。

元來大君の名稱が特に將軍に限つて使用さるゝに至つたか、之がこゝに考察さるべき重大なる問題で、之によつて公が家憲第一條に掲げた大君が何を指すものか、果して其家系なる徳川將軍を指したるか、否かを明にし得るのである。

本來大君なる詞の出典は周易である。周易師卦上六に、大君有命、開國承家とあり、又其象には、大君有命以正功也とある。之は疑もなく皇帝に對する語で、大君とは天命、天徳を保有し、天下に君臨し、治切を整正するものとの義である。公の著書二程治教錄の中にも、之を引用して

師上六、大君有命、開國承家、小人勿用、傳曰上帥之終也、切之成也、大君以爵命賞有功也、開國封之爲諸侯也、承家以卿大夫也、小人者雖有功不可用也、故使勿用云々

とある。これが本來の用法と思ふ。而して公は日本と支那との國柄の相違を述べて、日本には代々の天皇が國家の中心であり、將軍、諸卿、諸大夫は其命令に服従すべきものと信じた。

かく大君は當然將軍に非ずして天皇を指すべき筈であるに拘らず、段々漢學勃興の際に當り、かゝる出典の論議を別とし、實際上政權の中心たる將軍に適用されるに至つたのであつて、特に外國との贈答國書には、又詩文中に

は

我源大君、御于前殿、三使捧國書、貢于万物、
とか。

大君之美譽芳聲、與神徳共亦須永傳于不朽者也

とか、又

貴國大君、昭代御連續、四海無事

といふ風に用ひられたことは、羅山文集其他に散見し、特に元祿以後の儒者は然りである。綱吉將軍時代の閣老堀田正俊の如き、其著書錄等に記する幕府に對する用語は、餘りに僭越と考へらるゝもの多きは、所謂漢土模倣の弊を見るべきものに非ざるか。

然し元祿以前の文を見ると、將軍の場合には多く、源大君、源府君、大君大樹、大君幕下、または大樹源君と稱してゐる。

元祿以後に於ても頼山陽の如きは、太君の意義を正確に取扱ふて居り、詠史の中に頼朝を詠じた詩がある。其起句に

白旆披拂九重雲 初見武人爲大君

とあり、この初見武人爲大君は、周易履卦六三に眇能視、跛能履、履虎尾、咥人凶、武人爲于大君の語より出たと思はるゝが、朱子の註には剛武の人の志を得て肆暴をなす象なり、秦政、項籍の如く豈に能く久しからんやと

あり、また先人の説にも、剛武は肆暴の武人なり、即帝位にあらず、位當らざるなりとあつて、大君なる語が矢張皇帝の義に用らる。山陽は之を用ゐて幕府の創業を謳歌してゐるのであつて、殊更周易の語を誤用して將軍の意義に用ゐたとは考へられぬ。

最後に徳川初期に於ては、大君なる語が必ずしも將軍にのみ用ゐられたものでないといふ一二の例證を擧げて見よう。

當時の勤王派水戸の先覺の著書を調べると、大日本史編纂總裁たりし安積覺(澹泊)の文集中に、水戸の藩公を大君と稱してゐる。之は水府系纂序、義公行實跋、西山遺事序等を繙かば明かである。即ち

恭惟、大君閣下、至性篤孝、善繼先志……惟義公揆之於始。閣下成之於後云々(水府系纂序)

享保癸卯秋、大君閣下、命臣覺刪表釐正、當時與共編纂者、皆已物故云々(義公行實跋)

伏惟、大君閣下、好學篤行、日就月將、仔肩克迪、祖武堂構、有光前烈(西山遺事序)

又水戸義公が落葉の詩を賦するや家臣是に和して左の詩を献した。

鶯^{ツツシ}戯^{シラギ}大君相公落葉高韻^{ウツ}題別業所^見

吉弘元常

斯可^レ徑^ニ秋色、野花織^ニ草茵、葉零露^ニ林鹿、

雲漲隱^ニ溪鱗、泉石自封境、煙霞使比隣、

山中清事會、緩步代^ニ歸輪、

何れも藩公を指してゐるもので、將軍に非ざることは、いふまでもない。

また林羅山が朝鮮使節との問答を見ると、將軍以外(日本ではないが)の場合に用ゐて居り、進士文弘續に問ふ語に

貴邦有^ニ陣法書、紫陽大君作^レ序、紫陽大君、想是殿下之天倫也、欲^レ聞^ニ其詳、

後年進七朴安期に對して

紫陽大君、是何王之親族乎、敢問、安期曰、我國無^ニ紫陽大君、必誤書、或傳說也、先生曰、此書僅一冊有^ニ五行陣法及行伍旌旗鼓角之節制、貴國板本今見^ニ在^ニ本朝何日、無^レ之乎、景泰年中人也、安期曰、然則或其別號、故未^ニ聞也、大君職無^ニ紫陽、

と。こゝには王族に對して大君を適用せるものと見らる。

猶羅山の隨筆中には、將軍を柳菴及び幕下、幕府と稱することに付き、考證詳細を極むるものあるに拘らず、更に大君に及ばざるは遺憾であるが、これより推察しても大君が將軍のみの用語ならざりしと思はれる。

正之公の家憲に見ゆる大君なる語は、此等の何れを意味するか。

徳川幕府の建設日遠く、未だ安定を見るに至らず、殊に會津藩には新規御抱が非常な多数を占め、之が統率はや易の業に非ざることは、會津古人傳、干城傳等の示すが如く、公の嗣子は公に比肩すべき人物に非ず、かくて公は家の安態を謀らんが爲に、この家憲を作つて藩主への忠誠を奨励したるものなりや、また其宗家たる徳川將軍家の繼續を目的として之を作れるものなりや。果して然りとせば、之は彼の非常なる博學と非凡なる經世の才を有する公として餘りに意圖の狭少に過ぐるを思はしむる。特に其文は闇齋の潤色と加筆を経たりといふ以上、益々疑問たらしめるを得ざる可く、この大君なる語には古典的な意義を含ましめ、廣く人和武人としての本領、國家皇室を中心とせる奉公無二の誠忠なる武人を作るにあつたと考へねばならぬ。

勿論、公及び闇齋は、日本に革命の起るべき筈はなく、また皇室に對しては露程逆意を挿み得べきに非ずとの強き信念を有せしが故に、萬一徳川氏が昭の驥を問はるゝ場合の生ずるとも、會津藩として取るべき態度は、須らく大義名分を誤たざるにありしと考へらる。之は會津武士に存したる勤王心、また容保公の忠誠が最善く之を證明する所である。かくて後世明治戊辰の變に現れた悲しむべき事實を以て直ちに家訓第一條が將軍家の擁立を目的とする影響なりと考ふる如きは淺見の甚きものといはねばならぬ。